

『桜姫東文章』にみる桜姫の特異性

——転生と因果、狂妄の姫君——

小 澤 由 紀 子

はじめに

『桜姫東文章』⁽¹⁾は文化一四年三月、河原崎座の初演で好評を博した鶴屋南北の作品である。南北の作品は、当時の世相を実に反映していると言える。なかでも『桜姫東文章』と『東海道四谷怪談』などエログロナンセンスの先駆けと見られる作品の特色に対し、渡辺萩乃氏は次にこう述べている。⁽²⁾

この二作品が書かれた江戸時代後期は、それまで続いていた幕藩体制が崩壊しつつあった時代である。庶民たちは、幕府の厳しい風俗取り締まりが意味をもたず、既存の秩序が次第に崩壊していくあやふやな世の中に翻弄されながら生きていた。善と悪の境目が曖昧になり、崩壊期の無秩序を具現化した猥雑でグロテスクな美や性、エネルギーが発生する。南

北はそれを敏感に読み取り、狂言作者として作品にその「時代」を描き込んでいた。

あやふやな境界線の横行する時代に描かれたからこそ、これらの作品は南北作品の中でもずば抜けて不気味でエロティックなものになっているのである。

本作は、一見ただの御家騒動にも思えるが、登場人物ごとに着眼点を変えると、物語は一気に色を変える。桜姫は、その変化する物語のヒロインとして君臨する、特異な女性である。本稿では、桜姫が登場する男二人とどのように関わり、どのように動き、そしてどのように物語に作用し影響を及ぼしているのか。また、桜姫は一体どんな人間であり、どう特異性があるのかを考えていく。

一 桜姫と二人の男（一）清玄

『桜姫東文章』には、清玄と釣鐘権助という二人の男が登場する。研究史をたどれば、やはりこの二人の男を中心に取り上げられることが多い。高貴な身分の桜姫は悪党の権助を、かつて白菊丸と愛を誓い裏切った清玄はその生まれ変わりの桜姫を愛した。これは実に奇妙で愛欲にまみれた歪な三角関係である。因果が複雑に絡み合い、連鎖、作用し合う三人の登場人物は、因果に苛まれながら物語の結末へと一直線に向かつていく。桜姫にとつて、因果で結ばれた彼ら二人の存在は非常に重要な影響を及ぼすものである。何故桜姫は自分の貞操を奪った権助に執着し、必死に尽くす清玄をあしらうのか。それを議論することもまた、この作品をより深く紐解くことに繋がるだろう。そしてこの矛盾を掘り下げていく最中、気付いたのは、桜姫、桜姫と清玄、桜姫と権助という三つの物語に置き換えられるということである。ただ南北に与えられたままに受け入れた物語は、入念に用意された因果によつて観衆に印象を残すが、しかしそれでは実に一辺倒な物語になってしまふ。見方を変えるだけで、それは色も形をも変え、観衆に鮮烈な印象と未知の体験を刻み込む。因果と運命の狭間に揺れ動く桜姫と、因果に捉われた男清玄、絶対的な悪党として存在

する権助の二人の男に焦点を当てて見ていく。

まず、清玄と桜姫であるが、ご存知の通り清玄と桜姫は、「清玄桜姫物」における登場人物である。姫である桜姫に執着し、身を滅ぼす僧侶清玄。この二人の関係性は切っても切り離せぬほど有名であり、かつ「清玄桜姫物」のセオリーである。そこに南北は、江の島の「児ヶ淵伝説」を織り込み、より複雑化させた。「清玄桜姫物」は数多く存在するが、その中に更にこの伝説を入れ二人の間に因果を入れ組む発想は実に新鮮であった。

この因果は絶大な効果をもたらした。それは、後述するもう一人の男・悪党釣鐘権助と桜姫の関係性との差別化である。結論から言えば、清玄に桜姫に対する明確な愛情は存在しない。存在するのは、慈悲のような、彼女の影に存在する白菊丸に対する罪悪感と憐みである。清玄が桜姫と権助の密通の罪を被るには、香箱(3)が突きつけた、桜姫が白菊丸の生まれ変わりであるという事実のみで十分過ぎる動機になるのである。そんな清玄と、かつての白菊丸の生まれ変わりである桜姫。この二人を中心に物語を読んでいくと、それはある種の「白菊丸の復讐譚」に変貌するのである。この二人に焦点を当てた際に重要となってくるのが、香箱の存在である。

清玄（自久）には白菊丸という稚児と共に心中を図り、自分だ

け死に遅れた過去がある。彼はそれを酷く悔やんでおり、白菊丸の落ちた海底に向かい合掌している様子が印象的である。この時点では、既に死亡した白菊丸の心情描写はもろろんないが、自分と愛を誓い香箱に互いの名を書いて来世では結ばれようとした相手に裏切られた未練は到底計り知れない。時は流れ、十七年後。

桜姫と清玄が最初に出逢うのは、高僧となった清玄の方丈する清水寺。桜姫が自らの因果を儚んで出家を望む場面であった。客人と僧侶という立場で、互いの存在や因果を意識すらもしていない段階である。清玄は桜姫に対し女性としての幸せを論じている。

しかし、清玄が十念を唱え、開かなかつた左手が開き、出てきた「清玄」の名の書かれた香箱を見ると、清玄の態度が一変する。本文の引用は、廣末保『桜姫東文章 歌舞伎オン・ステージⅤ』一九九〇年・白水社による。以下引用部分には、頁数を付す。

清玄（中略）たゞこれよりは釈迦の御弟子となり、愛欲の道を断ち切り、たゞ一筋に念仏修行怠慢なく、前世の業を滅せしめて、湍滅の後西方の弥陀の御国へ至られよ。

その香箱の片しこそ、御身がための善知識。（四十一頁）

香箱により桜姫は白菊丸の方程式が完成し、清玄がその存在を確信したことが伺える。清玄は、心中の直前に「どうぞ女子に生まれて来て、夫婦になりとう思います。」（十七頁）と言った白

菊丸が、その願いを叶えて目の前にいる因果に対して、恐れ慄いている。この出逢い、否、再会は清玄を非常に動かすものとなった。

その後、出家を決意し剃髪の時を待つ間に、桜姫は待ち人権助との再会を果たす。再会を機に情交に耽る二人は、その場を見つかつてしまう。上手く逃げおせた権助であったが、残された桜姫は言い逃れができない。しかし、悪五郎の言葉によって香箱を理由に桜姫はその相手を清玄だと言って濡れ衣を着せる。清玄は僧侶の身であることを自覚し、決して桜姫に恋慕の情を抱くことにはないと断言し、香箱を証拠とすることを否定するも、桜姫は已然と清玄の罪を告白する。これは既に権助との最初の契りです宿しており、また体に権助と同じ入れ墨を彫った状態であるからゆえに、ここで権助の名を出し不義に加え不貞の罪に問われるよりも、別の誰かに一方的に契りを結ばれたとこじつけた方が自身の罪が軽くなることを心得ての行動ではないだろうか。許しを請う発言はしているものの、決して清玄の無実を主張せず、権助を庇う様子が実に印象的である。姫としての立場を考えていればこそ、それは仕方ないことなのかもしれない。一方の清玄はというと、冤罪を主張することもなく、ただこれを因果として受け入れ、桜姫と共に破滅の道歩むことを選んだ。半ば諦めと、またこれが過去の宿命であると自らを罰しているようにも、度重なる

思入れて伝わってくる。

また、ここで本作において香箱の重要性が浮かび上がってくる。香箱をきつかけに、これまで他人として生きてきた二人が関わり、そして混ざり擦れ違っていくのである。いわば香箱は、歯車のような作用をしている。廻し、狂わせ、止まっていた時を進ませるのだ。皮肉にも、愛し合い来世での成就を祈つて名を刻んだ香箱によって、転生と因果を自覚させられ、香箱によってかつての恋人に罪を擦り付けられるのである。清玄と白菊丸にとってこの香箱の存在は大切なものであつたはずだが、それを桜姫はいとも簡単に壊していく。前世や因果など気にせず、ただ思うがままに行動する桜姫の姿を見ても、それに対し心から抗えないのは、やはりその背景にある白菊丸に対する罪悪感が大いに影響しているからであろう。

清玄 ア、イヤく、言つて下さるな。人を助ける出家の身。

これは女に迷いし出家。我は無実の罪ながら、これまで過ぎにし十七年、散り行く花の白菊と。

桜姫 エ、またかいな。その白菊とは何かいナア。

清玄 サア、菊の盛りを散らしたる。その罪人は即ち清玄。

かゝる業因深き身の、浮かむ瀬いつか世もあるまい。しからば今より破壊墮落の前世にて、契りし稚児と思ひ替

え、そなたの力となりましょう。(一一二・一一三頁)

傍線部の表現は、実に南北の工夫が凝らされた表現であろう。ただ白菊丸を見殺しにしたというのではなく、その様子を花になぞらえて「散る」と表現している。菊は供花や弔花として用いられる花であり、「死」のイメージが非常に強い。対して桜は、毎年散つてもまた翌年同じように花を咲かせることから「再生」のイメージがある。その二つを用いて因果の切るに切れぬ係を表すのも面白く、南北の遊び心が垣間見える。後に菊と桜は日本の国花であるとして一般化されたが、これは何かの偶然であろうか。この次に、桜姫は清玄が白菊丸という稚児の因果を自身に重ね、それに責任を感じていることを告げられる。桜姫は一度因果を否定したが、しかし僧侶の証でもある数珠を切り捨てたことで、その思ひは本物であると確信する。清玄と桜姫が同じ「白菊丸」の因果の渦に取り込まれ、歯車が加速していく。この後、桜姫と別れて赤子を抱き彷徨う清玄は、残月と長浦の手によつて青蛇蝎の毒で殺される。直後に雷鳴の衝撃で生き返るといふなんとも南北らしい蘇生劇が展開されるが、一度殺されたという事実は清玄に動きを与える。いよいよ味方もおらず、信用できる者もない。愛する人の生まれ変わりとは離れ離れになつたうえ、想いは届かず、抱える赤ん坊は顔も分からない誰かの子。破戒という道は、一

人で歩むには險しすぎるものであった。

再び「死」という選択肢しか残らない追い込まれた状況になった清玄は、桜姫に心中を迫る。児ヶ淵で白菊丸と心中を図った際にも、現世での成就不いと確信し、死ぬことでしか果たせないと極限状態に陥っていたことだろう。清玄は十七年経ち、修行を積み高僧になつてもなお、同じ選択しかできない哀れな男である。違うのは、一度死んだ身であるからか、今度こそ本当に心中をしてこの因果を断ち切ろうとしていることと、自らの手で相手の命を絶とうとしていることである。そこから、現世への絶望と、来世で縁を結んで幸せになろうという清玄の強い意志が読み取れる。白菊丸と桜姫の因果に裏切られ続けてもなお、因果を妄信し、因果に絶する異常なまでの執着心を見せる清玄は、観衆にこの作品における因果の在り方やその意義を知らしめるものとなるだろう。冒頭に江の島の児ヶ淵伝説を取り入れた意味が、ここで更に生きとくる。

そんな清玄の姿に桜姫は酷く動揺し拒絶する。いくら香箱という証拠があつたとしても、実際に白菊丸と桜姫の双方を見てきた清玄ほどにその因果を妄信してはいないのである。これまで何度も清玄が口にしてきた「因果」という言葉を、これほどまでにあつさりりと否定し、崩されてしまう。いや、自分が殺される局面にあつ

さりという表現は間違いかもしれないが、しかしそこで共に死んでしまおうという気持ちにはこれっぽちもなかったのである。むしろ、その因果の糸に加わつてきた第三者である釣鐘権助の存在により、清玄はただ桜姫を支えるだけの、それ以上を望んではならない存在に成り下がったのである。

最終的に清玄は桜姫によって殺される。そこで桜姫（白菊丸）は負の因果を断ち切り、かつて自分を裏切つた清玄に対しての復讐が果たされたように思える。その行動は、桜姫としてのものなのか。それとも、因果の渦に吞まれながら姿を現した白菊丸がとらせたものなのか。果たして偶然なのか、必然なのか。運命なのか因果なのか。これら一連の行動に対し、桜姫（白菊丸）の狡猾な一面を見出すのか、遺恨に囚われ苛まれた白菊丸の面影を見出すのか、それは観衆に委ねられるのである。

その後、殺された清玄が枕元に現れたときの女郎桜姫の対応で、この「殺し」という行為を経て二人がどう変化したかが如実に現れた。桜姫は、清玄の幽霊のせいで自らの客足が遠のくことに對して怒りをあらわにしている。皮肉なりズムで淡々と清玄に言葉を投げている桜姫。そこには互いだけを想つて愛を誓つた白菊丸の面影を残した桜姫はなく、複数の名も知れぬ相手と積極的に偽りの愛を誓う風鈴お姫となつていた。因果よりも仕事（稼ぎ）を

優先する桜姫は、自分に心中を求めてきた清玄を心底軽蔑しているのだ。むしろ、権助に騙されながらもここで女郎として働くことを選んだのは、白菊丸の生まれ変わりであると烙印を押された過去の自分を拭い去るための彼女の意志だったのではないだろうか。二人の間に残るのは愛情ではなく悔恨であり、因果で繋がれた関係が完全に崩壊したことが分かる。因果の糸を切り、執着していた清玄を殺し、恨みを抱えていたのであろう白菊丸の復讐は桜姫により果たされた。白菊丸を背負っていた姫は、女郎となり名を変えらることでその存在を一時的に消滅させ、清玄との因果からの脱却を果たした。こう読み取ること、清玄と桜姫に着目して見た『桜姫東文章』は、白菊丸が桜姫と共に遂げた復讐譚となりえるのではないだろうか。

二 桜姫と二人の男 (二) 権助

次に権助であるが、桜姫のこの彼への心酔は、毎回のよう議論されている。それこそ、桜姫「エロス、愛欲」といった大衆イメージを植え付けるには十分な、自身の純情を弄んだ男への快樂的側面からの心酔であるという説⁽⁴⁾が一つ。

桜姫が、強姦者それも顔も見知らぬ男に、操を立てるとは、一夫一妻の觀念に囚われてのことか、それとも觀念などない

肉体のみの存在であるゆえか。おそらく後者だろう。権助との一夜ゆえに、子供まで生んでいるのである。

この説を追って、中村恵氏によるもう一つの説⁽⁵⁾が提唱された。桜姫の権助に関する読みである。以下に部分引用する。

桜姫（中略）たとえ其方は下様の、氏系図無き者にせませよ、妾が初めて見えし御殿。

悪縁契り深きといふ、誓へに逢はぬ、可哀やあの子も。

傍線部の桜姫の台詞から、姫にとって権助は初めて体を許した相手であるから、たとえどんな男であつても添い遂げなくてはならぬという強い気持ちを読み取れるはずである。

つまり、姫としての貞操觀念からくるものではないかとの説である。この説は、これまでの姫の身体的依存のイメージを大きく覆すものであった。桜姫は女性としての快樂に溺れ、ただなりふり構わず権助を追い求める憐れな女ではなく、むしろどんなに非道な男だったとしても、交わした契りは必ず守ろうとする姫としての気高さが見えてくる。

本作の焦点を、権助と桜姫に当ててみると、今度は桜姫の女性像が浮き彫りになり、また女性性の強調が見えてくる。二人の出逢いは、夜盗の権助が吉田邸に忍び込み桜姫を強姦することから始まる、何とも不整なものであった。桜姫はまだ十七歳と若く、

縁談の話は出ているものの、姫という立場から自由な身で逢瀬を重ねることもなく、その貞節を守り続けてきた。そこに、突然権助という、当時は顔も名も知らぬ男に突然奪われたのである。唯一の手掛かりは釣鐘の入れ墨だけで、それ以外の情報は一切与えられず、ただ少女から女性へと無理矢理転身させられたのである。作中には、それらの詳しい描写はなされていないにせよ、今まで丁重に姫として扱われてきた身に突如降りかかった災難は、酷く彼女を苦しめたことだろう。しかし、心のどこかで女性を芽生えさせてしまったのも事実、また姫として一度の契りを重んじるというのも事実で、その両方を兼ね備えていると考える。その二つの感情に揺れ動きながら、彼女は苦渋の決断で出家を選ぶのである。

出家を申し出る際に、清玄に「人並みならぬこの身ゆえ、せめて世を捨て御仏に、お仕え申すものならば、少しは罪も消えやせん。」(三七頁)と告げている。この台詞は、もちろん人生生まれつき左手が開かない自身のことを「人並みならぬ」と表現しているのだろうが、同時に「姫であるにも関わらず、夜盗に強姦され子を生み落とし入れ墨を彫ってしまった」という、人道に背いた行為を指しているのではないだろうか。また、この罪という部分に関しても同様に、万全ではない体に対してと、自分の貞操を奪った

男に二つの矛盾した感情を抱いてしまったという意味が密かに込められているのではないか。きっと、一人で計り知れない恐怖と戦ってきたであろう姫が、しかし今もなお誰かに話すというわけにもいかず、必死の告白をしている場面に感じられる。

出家を待つ庵室にて再会した際に、権助に縋ってしまったのも、その小さな体に抱えていた不安を、解消できる相手と出逢えたこととで一気に発散されてしまったもののではないか。女性は異性に関する相談できない悩みを一人で抱えやすく、特にまたその恋煩いの不安は冥途の飛脚よろしく突飛な行動へと繋げる原動力になる。

物語の中で度々、桜姫は二人の男の中で自分が「女性」であると自覚させられる場面が多々ある。児ヶ淵伝説の前置きを経て、本編は吉田家の桜姫が縁談を断られる場面から始まるが、そこで桜姫は「姫」という地位を利用されていることが読み取れる。十七歳、年頃の女性なら思い人の一つもあってもおかしくない年齢であるが、桜姫は姫である立場からその感情を持つてはならないのだ。そのとき既に頭の片隅にあつたであろう権助と、その赤ん坊の存在を押し殺して縁談に臨んだ姫の思いが無下にされたのである。度重なる不幸に自責の念を感じ出家を決意した桜姫は、一度性や愛、そういった俗的なものから遠ざかるつもりであった。

しかし、そこに入れ墨を目印に権助との再会の機会が訪れることで、桜姫は自身の中にある女性としての感情を呼び起こされる。まして桜姫は、これまで箱入りで大事に育てられてきたがゆえに、一度肌を触れ合った男とは契を交わし夫婦になると信じているのである。出家の目前で会いたいと願っていた相手に再会し、晴れて女房になれると顔を隠し初々しく話す桜姫は実に健気で、また権助に迫られ更に恥ずかしげに逃げる無垢な姿も見受けられ、まだあどけなさの残る十七歳の表情も伺える。だが、悪党権助の非道さによってその期待はことごとく裏切られていき、また一方で白菊丸との因果に固執する清玄により、桜姫は翻弄される。その姿は、実に哀れでしかし美しい。二人の間に揺らぎ存在する桜姫が物語の中でどう動いていくか、何を思っていくか、観衆はその感情すらも娯楽に変え、展開を楽しんでいく。

話が進むにつれ、権助と関わり、どんどん女性として開花していく桜姫。中でも、最も女性性が協調されたのは、権助が桜姫を小塚原の女郎屋に売り、桜姫が格安女郎に成り下がる場面である。今まで吉田家の姫として箱入りに育てられてきた純粋な少女が、女性となり、売り物となり、男たちに見定められ買われ、商品として扱われるのである。こうした性の売り買いは、女性に限ったことではないが、しかし女性だからこそ際立つ悲痛さもあるのだら

う。例えたった数日であろうと、枕元に清玄の幽霊が出ようと、それは関係ない。自分が性の対象として捉えられ、なおかつ金銭との交換で自身を守り続けてきたはずの貞節が容易く渡ってしまふのである。しかも桜姫をその立場へ引き入れたのは、紛うことなき権助本人である。どう捉えれば心が傷付かなくて済むのだろうか。この行為はどう考えても好意的には思えない。第一に慣れてしまうこと、染まってしまうことが一番の身と心の防衛策だ。この場面にて、以前までは男と肌を触れ合ったという事実だけでも恥じらっていた桜姫は、所々に元々の公家言葉を交えながら女郎の粗雑な言葉を話し始める。女郎として、女として自立したその姿は、どこか孤独で悲しく見える。この項目については、後で論述することとするが、この言葉遣いの違いは、桜姫を紐解くのに重要な項目の一つである。桜姫と枕を交わす時に、得体の知れぬ僧侶の幽霊が枕元に立つという光景は、桜姫の美とは対照的であり、清玄のより一層の不気味さを引き立たせる演出となる。店の仕込みも相まって、桜姫は次第に夜の世界へと溶け込んでいくのであった。

このように、今度は権助と桜姫に着目して読むと、桜姫の女性の強調が見て取れる。一家の御家騒動の中に、一人の女性の成長が織り交ぜられているのである。その成長はただ順調ではなく

障害物によつて苛酷な境遇を強いられ、物語性をも増していく。

清玄を中心にした時の桜姫の因果を切り捨てるある種の残酷な一面を見る反面、権助を中心すると女性の性を弄ばれる憐れな一面が見えるというこの対比は実に面白いのではないだろうか。清玄と権助、正反対の二人の存在は桜姫の持つ二面性にも大きく影響している。むしろ、二人それぞれに別の読み取り方ができるからこそ、この矛盾にまみれた桜姫の人物像が生成されたのである。この隠された二つの読み方をするによつて、南北の散りばめた台詞が命を抱き、そこに様々な物語と感情が発生するのである。それらに観衆は一喜一憂し、南北劇に感嘆し、時代を越えて多様な解釈を生み出すのだ。

三 「罪」と「罰」の存在意義

生まれも育ちも、辿つた運命も違う桜姫、清玄、権助の三人。しかしこの三人には、確かな共通点がある。それは、全員が罪を犯した人間であるということである。そしてそれに対し、それぞれ対価を受けている。この対価は、登場人物たちを大きく揺れ動かし、ついでにいく。

「児ヶ淵伝説」に添い、清玄とかつての桜姫（白菊丸）は、衆道の罪を犯した。この罪は、物語の発端となる場面で非常に意味の

あるものになっている。この罪の存在により、物語にきつかけが生まれる。罪を負い目にまたも罪を重ねる罪の輪廻に捉われし僧侶と、それを実行し来世で生まれつき左手の開かない不具の姫となつた白菊丸の存在は、実に特徴的であり観衆に強烈な印象を与える。もしもこの罪を犯したという前提がなければ、振り回される清玄の存在に苛立ちや疑問を覚えかねないうえ、桜姫のその矛盾した行動も理由がなく空っぽなものになつただろう。罪を犯しその結果としての因果という前提があるからこそ、物語に興行が発生し、違和感を払拭するのである。

また、権助に関しても罪が物語のきつかけとなる。吉田家に忍び込み人を殺し都鳥の一卷を盗んだのも、桜姫を強姦し入れ墨をも彫らせたのも、全て権助の罪によつて起こつたものである。桜姫の因果の発端が清玄との罪であつたとするならば、現世の桜姫の運命を左右させたのは、間違いなく権助の罪だ。権助は、時折その姿を桜姫の前に現すことで、その存在感で彼女を圧倒し、惑わせていく。その姿は、まるで清玄に及ばないほど強く、迷いのない罪である。権助の重ね、抱いている罪の重さの違いなのだろうか。また、この権助が最後死ぬことで物語は終焉を迎える。逆に言うならば、権助は桜姫に殺されるという末路に至るまで、具体的な罰が下されていない。途中、清玄と実の兄弟であることが

発覚し、顔に清玄と同じ痣が浮き上がる場面があるが、それは自覚のあるものでもないうえ、痛みなども伴っていないため、罰とは言えないだろう。しかし、展開において権助が罪を犯すたびにその都度罰を下していた場合、なんとも間抜けな悪党像になってしまうので、最後赤子と共に殺されるといふシンプルでかつ残酷な結末を一身に負わせ、その罪の重さを表現したのではないだろうか。このように、『桜姫東文章』における「罪」と「罰」の存在は、展開の起因となつて作用する必要不可欠なものなのである。

ここでのそれらの罪の重さを見ていく。まず、清玄が桜姫との因果を作り上げた元となる衆道の罪。衆道は、『大辞林 第三版』⁽⁶⁾には〈「若衆道」の略。男色。若道。〉とある。男色とは即ち男性の同性愛のことである。非常に禁欲的であつた僧侶たちにとつて、大人になる一歩手前の稚児は、性別を超越した稀な存在であつた。以下、稚児についての資料がある。⁽⁷⁾

ところで、中世の寺院社会における、僧の男色相手といえ
ば、童子とか稚児と呼ばれた、垂れ髪の男児が有名です。(中
略)

童子は、「長い髪を結び、化粧し、鉄槩(おはぐろ)をつけ、水干を着ながら小袖をかすいて、さながら女人をよそおう女人ならざるもの。それは男でありながら同時に男ではない。

童子の間にしか保たれぬ中性的な」(阿部泰郎、一九九八)存
在とされてきました。

さしずめ、清玄と桜姫(白菊丸)の犯した衆道の罪は、当時は一般的であつたとされ、特別咎められるものではなかつた。しかし、それはあくまで生を全うしての話である。人に教えを説き、先導する立場である僧侶清玄は、仏教の「不殺生」「不害」の教えを破り、自殺という「自らを殺す行為」を行った。その上、愛欲と煩惱からした心中であるから、到底許されるものではなく、それは衆道を遥かに超越する重さの罪である。しかし、これを完全な「悪」と言えるのかといつたら、断言はしかねるであらう。

僧侶の衆道と心中の罪以上に大罪を犯した者がいる。言わずもがな、悪党釣鐘権助である。権助は、本作において良心を一切見せていない。徹底した「悪」という立場におり、裁かれることなく常に罪を重ね続ける。しかしその「悪」の存在に心惹かれていく人物さえいるのである。それは、権助が絶対悪に君臨するからこそその意外性である。仮にもしも物語の最中で、権助が一般的に善いとされる行いをした場合、そこで権助というキャラクターに「悪」以外のイメージが付してしまい、それは不必要な要素となりうる。絶対悪というキャラクターの軸をぶらし、観衆に余計な印象を抱かせてしまうと、権助は魅力を失ってしまうといつても過

言ではない。作中には別に「悪」であり「正」である登場人物は既に存在する。清玄である。罪を犯した「悪」という側面を持ちながらも、改心して桜姫に尽くす姿は、慈悲的でまさに「正」である。そして「悪」によって「正」にいた立場の人間が「悪」と同等の行為をしてしまう、翻弄される人物が桜姫である。三人は罪を犯したという点は共通しているが、しかし権助以外の二人は絶対悪とは言い切れないポジションにいる。清玄も、このまま一心に桜姫に尽くし、別の形で白菊丸の無念を晴らせていけば、ほぼ完全なる「正」の立場にいたことができたかもしれない。桜姫も権助の「絶対悪」に魅了されなければ、清玄を「悪」に引き入れることも、自らを「悪」に墮とすこともなかったのかもしれない。そう考えると、清玄と桜姫は権助の「絶対悪」を根源とする「悪」のパワーに染められてしまった被害者なのかもしれない。それほどまでに、奥底に抱える罪の因果や「悪」の力が強いということである。

また、『桜姫東文章』における罪の存在意義は、物語の機動装置以外の役割も果たしているであろう。殺す（罪を犯す）という非日常の行為を当たり前に行う権助に対し、心中を誓った相手をやむなく殺してしまった過去を悔やむ清玄、家族を殺され左手も開かぬ不遇な桜姫。最初は「悪」である権助と、清玄と桜姫の対比

が際立っていた。しかしその後、かつての心中相手の生まれ変わりと共に再び心中を図ろうと殺しにくる清玄、一度目は誤りといえど二度目は明確な殺意をもって殺人に及んだ桜姫と、次第に善悪の対比が薄れてゆく。互いが互いを求めるばかりに、殺しという非日常の行為が日常になっていくのである。この変化が絶妙で、南北劇の面白さに拍車をかけている。『桜姫東文章』において、罪は運命を加速させ変化させるものであり、欠かせないものであるのだ。

四 墮ちた姫の名の意味

桜姫の腕には、入れ墨が彫られている。自らの貞操を奪った釣鐘権助の体に彫られていたのと同じもので、それこそが、現世における桜姫と権助の因果の証である。桜姫は女郎に身を落とした際、その入れ墨の模様から「風鈴お姫」と呼ばれ、店でも評判の女郎になった。桜姫と揉め、誤って死んだ清玄の幽霊が枕元に立つという噂が流れるまでは、それこそ一流の格安女郎であった。

かつて吉原をはじめとした遊郭・女郎屋で働く女郎たちは、自身の愛する人（客）に対して心中立てという行為を行ってきた。それは、お互いの恋を成就させるために、またはその愛の証として、女郎が自らの小指を切って渡したり、髪を渡したりするのだ。

その心中立ての一つに、入れ墨があつた。体に愛する人の名前を刻むことにより、その愛を確立させようとするのだ。以下に引用する。⁽⁸⁾

遊び女たちは、「天泉・天府・狭白の穴」から「温留・遍歴の穴」「風市・箕門・陰包の穴」にいたるまで、肌のかぎりに、愛人の名を彫青し、わけて「おもひよる男」にかゝせて其筆跡を挿入るを規模」としたというが、それはもちろん、男の側からなされる女への心中立てにおいても、同様に當為されたものであろう。(中略)

愛人の名は、いったん彫り込まれば、すなわち永遠であり、不動である。(中略) もつとも不可視・不可説なるもの、すなわち愛の表象である。

桜姫の体に刻まれた、釣鐘の模様は即ち権助自身を表すものである。加えて、桜の模様も彫られているとあらば、それは紛れもなく桜姫自身のシンボルであろう。まだ姫という立場にありながら、体にその名を刻んだことで、桜姫は女郎転落の運命に捉えられてしまった。また、これは観衆に今後の展開を示唆させる効果をもたらしめているのではないだろうか。

次に、桜姫の「風鈴お姫」の名について触れていきたい。作中には、権助の男勝りな皮膚に彫られた力強い入れ墨は釣鐘と見受

けられるが、それに反して細い女子の肌に彫られた釣鐘は「あまりに小さいがゆえに風鈴にしか見えない」というのが由来でそう呼ばれるようになったとある。しかし、それ以外に南北が釣鐘を風鈴と見立てた意味があるのではないだろうか。風鈴は、元々中国で古くに使われていた占風鐸という道具が起源であるとされている。⁽⁹⁾竹林に下げ風向きや音色で吉兆を占うというものであったが、仏教と共に日本に伝来し、その音の間こえる範囲には災いが起らないという言い伝えが浸透していった。南北が桜姫の入れ墨を「風鈴」とした意味は、風鈴の持つ魔除けの意味からではないだろうか。その風鈴は、音によつてその周囲の魔を祓う。吉田家が没落しかけた直後に、桜姫は「釣鐘」の入れ墨を彫った。しかし、権助によつて女郎屋に入れられた桜姫の彫り物は、周りの人間により「風鈴」へと変化を遂げた。今まで「釣鐘」として、逢瀬を願つた悪党釣鐘権助を象徴する負(悪)の産物であったが、「風鈴」となったそれは、魔除けとしての効力を発揮し、(清玄の幽霊のせいではあるが)負である女郎桜姫の客人を祓つたのである。この名前の変化こそが、桜姫の行く末を左右したといつても過言ではない。そこに、桜姫が「釣鐘お姫」ではなく「風鈴お姫」と呼ばれた意味が秘められているのではないだろうか。

五 桜姫に眠る二面性

この物語の主人公は、吉田家の桜姫である。高貴な身分として世に生を受けながら、数々の不幸をその身に受ける。しかし、ただの気の毒な姫では終わらず、出家を願う反面、過去に貞操を奪った男の面影を追いつめて自らの体に墨を入れるという突飛な一面も見せる。一般的に、彼女の二面性を最も象徴する場面は、桜姫が権助に騙されて女郎に身を落としたときの桜姫の振る舞いであろう。かつて姫だった女性が、格安女郎として働くことになるという異常な展開。この身の転落は実に衝撃的であり、他とないものだろう。桜姫は、女郎独特の粗雑な言葉遣いと、元の大名家の姫らしい公家言葉を混ぜて話し、前半とは全く違った人格を形成している。女将によって仕込まれた「下素ばり」のこの独特な喋り口調は当時から見所の一つともされてきたが、近年の研究でもやはり、桜姫の抱える姫としての側面と女郎としての側面のギャップに取り憑かれる者も多い。

この異端な境遇のヒロインは、品川の女郎屋にいた京の日野中納言の娘と自称する実在の女郎をモデルに作られたと言われている。元々存在した、女郎でありながらも姫のような振る舞いをする奇妙な女性をベースに、更に設定を加えて創造された桜姫。現

実と仮想の絶妙な織り交ぜに、すんなりと「桜姫」という女性主人公を受け入れることができる。しかし、「桜姫」というキャラクターを受け入れることは簡単でも、その桜姫のとする行動に対し、多くの疑問や矛盾を覚えずにはいられない人が多くいる。それゆえに、初演からちょうど二百年も経つというのに、桜姫の本心は分からないままだ。

本稿では、本当に彼女の二面性を表す場面は女郎堕ちした時ではなく、終盤権助を刺し殺す場面であると考える。酔った権助が悪びれた様子もなく告白したことを聞いた齡十七の姫が、事実を知ってから間髪入れず、泥酔させ刺し殺している。ここには一切の躊躇が見られず、権助と自らの赤子を仇であるとして、計画的かつ明確な殺意をもって及んでいる。衝撃的極まりないこの場面を最後に、『桜姫東文章』は幕を閉じる。かつて、開かない左手を傷んで出家を望み、例え夜盗であろうと肌を重ねた相手を夫として追いつめたこのか弱き姫が、父と弟を殺し一家を傾けた犯人と分かるや否や、躊躇なくその赤子諸共惨殺し、見事御家を復興させる。この場面こそ、最大にして最高の桜姫を象徴する場面と言えるのではないだろうか。

ここで、桜姫の中に眠る二面性を紐解くには、白菊丸の存在が必要不可欠である。桜姫は元を辿れば白菊丸という稚児であった。

そのことは、桜姫の開かずの左手に握られていた香箱が十二分に証明をしてくれている。桜姫は、清玄に出逢うまで、己の中に潜む白菊丸の存在を認知していなかった。それこそ、左手が開いた際には喜んで一方で、出てきた香箱を不審に思う。清玄の念で手が開き、清玄の目の前で開いたこの時から、桜姫と清玄は因果に絡み取られたのである。この時から、少しずつ桜姫の中に眠る白菊丸の断片が顔を出し、桜姫の行動の随所に登場する。権助と接し、清玄と接する中で、それぞれの因果を構築し捉われながら、桜姫の中の白菊丸は確実に覚醒していく。清玄に復讐を果たし、その因果を切つてもなお、桜姫の前世が白菊丸であるという事実に変わりはない。桜姫が一貫して矛盾した行動ばかりをとるのに、物語の展開を自ら発生させる役割を担うということは勿論のこと、その背景に存在する白菊丸の姿を無視することはできない。また、最後、髻を白刃で切り捨てたことにより、桜姫の長かった髪は短くなり、あたかも男性的な髪形になった。この行為を行ったと同時に時の鐘が鳴り、終焉を迎える台図となった。この断髪行為は、自身の姫としてのけじめか、復讐を遂げ男性二人の因果からの解放を示すものなのか、はたまた人を殺したことによりそれまで桜姫の奥にありじわじわと侵攻しつづつあった男性的な白菊丸が前面に押し出されたことによる行為であるのか。女性性と男性性、両

方を持つからこそ、それは特異であり、魅力にもなるのである。

おわりに

『桜姫東文章』は、主人公の桜姫を中心に見て、そのままの受け取り方をしてもよいのかもしれない。吉田家の姫・桜姫が二人の男によつて運命を狂わされ、一度は女郎に墮ちたが、そこで終わらず真の敵を知り復讐を果たす。観衆の心を弾ませるような、展開が二転三転する構成で、何も考えずに鑑賞したとしても、余韻は大いに残るであろう。しかし、ここで白菊丸の要素を追加し、南北があえて因果譚にしたことを考慮して見ると、桜姫の二面性とそこに隠された男性的白菊丸の面影が顔を出して、物語に無限の解釈と思考を提示する。他作品にない特徴的で異質なヒロイン像にしたかったからというのはもちろん、きつと、一房にいづくもの蕾をつけ経過する桜の花びらのように何通りの解釈を生んでもいいようにしたのかも知れない。桜は、何回春を迎えて何度同じ景色を見ようが変わらず花を携え、飽きさせることなく整然と存在する。桜姫に関しても、時代を越えても同じく変わらず彼女の魅力に引き込まれ続ける人が多く存在するのである。観衆を混乱させかねない二面性を持つ桜姫のキャラクター像は、春が来てほんの一瞬だけそれは美しい花を咲かせ、人々を魅了し、見事に

散っていく、移ろい激しいその名の通り桜のようだ。観衆に判断を委ねられた物語は、委ねられた数だけ発生し、感情を生み出し、娯楽となる。その解釈の多さに、今もなお人気作として依然と議論が交わされているのだから、そういった点で南北の思惑は大成功である。

そして桜姫はやはり、どの場面を見ても他とない特異性を持つ姫君であろう。それはまさに、転生し因果の狭間に生きる、狂妄（常軌を逸して道理にはずれた行動をする・こと（さま）⁽¹⁰⁾）の姫君と呼べるのではないだろうか。

注(1) 本稿では、廣末保『桜姫東文章 歌舞伎オン・ステージ』一

九九〇年 白水社を用いる。

(2) 渡辺琢乃氏の「歌舞伎生世話物研究―『桜姫東文章』・『東海道四谷怪談』について―」日本文学（東京女子大学）『日本文学』一〇九巻）二〇一三年 東京女子大学より引用。

(3) 香箱は、佐藤憲正『日本国語大辞典 第二版』二〇〇一年・小学館には「①香を入れる箱。こうこう。②女性の性器」とある。白菊丸が来世女性として生まれ再び結ばれることを願って、二つの意味が含まれるこの道具を握り締めて心中を囚ったのではないかと推測する。

(4) 松田修氏の「桜姫東文章の〈桜姫〉業（カルマ）を知らぬ業（カルマ）の女」國文學…解釈と教材の研究（學燈社）『國文學…解釈と教材の研究』第二七巻）一九八二年 學燈社より引用。こ

の他にも、桜姫を淫猥なものとする論は落合清彦氏や郡司正勝により提唱されている。

(5) 中村恵氏の「桜姫の純情と貞節―鶴屋南北作『桜姫東文章』より―」語文研究（九州大学国語国文学会）『語文研究』七二巻）一九九一年 九州大学国語国文学会より引用。

(6) 松村明『大辞林 第三版』二〇〇六年 三省堂より引用。男性は《なんしよく》とも読む。

(7) 松尾剛次『破戒と男性の仏教史』二〇〇八年 平凡社新書より引用。稚児は僧侶の生活に給仕する存在であったと同時に、夜の男性の相手でもあった。

(8) 松田修『刺青・性・死 逆光の日本美』二〇一六年 講談社より引用。入れ墨は、現代の技術をもってしてもなお、一度入れればその体から完全にそれを消し去ることは不可能とされている。よって、それゆえに半永久的なもの象徴として用いられることが多い。

(9) 有限会社篠原風鈴本舗の展開するウェブサイト「江戸風鈴の歴史」(<http://www.edofurin.com/history2.htm>)を参考。

(10) 松村明『大辞林 第三版』二〇〇六年 三省堂より引用。《きょうもう》、《きょうぼう》と読みが二つある。

(二〇一七年度卒業)